

塩田武士

Takeshi Shiota

雪

the scent of snow の

香

り



雪の香り
the scent of snow

Takeshi Shiota
塩田武士

ゆき かお 雪の香り

二〇一四年六月十日 第一刷発行

著者紹介

一九七九年兵庫県生まれ。関西学院大学卒。
神戸新聞社に入社後、二〇一〇年『盤上のアルファ』で
第五回小説現代長編新人賞を受賞しデビュー。同作は
第二十三回将棋ペンクラブ大賞文芸部門大賞を受賞。
二〇二二年神戸新聞社を退社。他著に『女神のタクト』
や『ともにがんばりましょう』、『崩壊』、『盤上に散る』
がある。幅広い作風と筆力で、今最も注目を集めている
新進作家の一人。

著者

しお たけし
塩田 武士

発行者

吉安 章

発行所

株式会社 文藝春秋
〒一〇二一八〇〇八
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 〇三―三二六五―一二二一



印刷所

大日本印刷

製本所

加藤製本

万一、落丁・乱丁の場合は送料小社負担でお取替えいたします。
小社製作部宛、お送りください。定価はカバーに表示してあります。

© Takeshi Shiota 2014 ISBN 978-4-16-390077-3
Printed in Japan

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、
私的使用以外のいかなる電子的複製行為も一切認められておりません。

雪の香り
目次

プロローグ

紙片

二月

雪

三月

終点

四月

桜

五月

追跡

六月

願い

七月

祇園祭

五山送り火

エピローグ

雪の香り
目次

プロローグ

紙片

二月

雪

三月

終点

四月

桜

五月

追跡

六月

願い

七月

祇園祭

五山送り火

エピローグ

335 281 227 175 123 69 21 5

雪の香り

プロローグ——紙片——

二〇一四年六月 「二年坂」

重なり合う想い出が、今もこの街に息づいている。

清水寺の仁王門から表に出ると、お仕置きのような強い日差しを浴びた。右手を庇^{ひさし}にし、明るい街並みに目をやった。音羽山の中腹にある寺は、言うまでもなく視点が高い。なだらかな西山を背景に京の市街地を望む。だが、物思いにふけるには、季節を前後した方がよさそうだ。

長袖の白シャツなんか着て来るんじゃないやなかった。

門から続く石の階段を足早に下る。石台に座る一対の狛犬は、ともに口を開いた阿形。「阿吽の呼吸」も結構だが、これはこれで景気がいい。目の前に続く清水坂に差し掛かるころには、ブラックジーンズの中に熱がこもり、燻製でもでぎるんじゃないかと思つた。それはちよつと大げさでも、せめて短パンにすればよかったと後悔した。

都の観光名所は、平日だつて賑々しい。風情ある石畳にすぎ間ができることはなく、軒を連ねる木造の商店には常に人の出入りがある。わざわざ梅雨の晴れ間に押し合いへし合いすることもあるまいと思う反面、その調子でお金を落としてくれたまえ、と観光課の役人でもないのにほく

そ笑む。この街に活気がなければ、自分だって商売上がったりだ。

陶器店に展示されている大土瓶の前で立ち止まる。知つてはいても値札の「0」を数えてしまふ。結構いい車が買える価格だが、土瓶は維持費がかからない。かつてこの美しい陶器を指差して「誰が買うん？」と言つた女がいた。

自然と定まる左側通行に流されて緩やかに坂を下つて行く。思い出したように香る八ツ橋の甘い匂いにホッとさせられる。見覚えのある土産物屋に、数種の小さなお福が飾られていた。振り返っているのもお気に入りだが、巨大な顔面を愛嬌たつぷりに傾け、三つ指をついているお福を見るとつい笑つてしまう。かつてこの愛らしい人形を「今、誰も見てへんで」とポケットに入れた女がいた。

いろんな漢字をプリントしたTシャツが、商店の軒先にぶら下がっている。「侍」や「道」といった立派な文字のシャツが並ぶ中、かつて店の奥から「起訴」と書かれた非売品を見つけてきた女がいた。

思い出すこと全てがバカバカしい。それなのに胸が苦しくなるから余計に腹が立つ。

三年坂の石段を見下ろす。

清^{すが}しい葉色を見せるシダレザクラ、黒い屋根瓦、揺れる日傘。二年前と変わらぬ景色に、時が遡^{さかのぼ}つていくような錯覚に陥つた。

石段の幅が広いため、常に同じ足で下りることになる。そうして一步一步、あの場所へと近づいていく。段が終わるとまた石畳の下り坂だ。

紫の着物に身を包んだ柴犬がダランと舌をぶら下げて、同じ色のTシャツを着た飼主の男を

見る。季節外れの厚着に抗議する犬の気持ち分からないのか、男は「よかつたねえ」と甲高い声を出してご機嫌だった。犬に同情するのは初めてか、違つたとしても久しぶりだ。

コロッケやたい焼きを売る店の前で、五、六人の修学旅行生たちが騒いでいた。ナイロン製のバッグについたキーホルダーが、一様に揺れている。少年ばかりだが、たい焼き一つで随分と楽しそうだ。それにしても、男というのを見ていてだけで暑苦しい。

年々、夏の日差しが憎らしくなっている。頭にカイロを乗せられたようで、ただ歩いているだけで試練が続く。問題はてつぺんだけではなく、つま先にまできている。ウォーキングシューズの中には、保温機能を疑いたくなるほどの熱を持つ。

タオル地のハンカチで顔と首筋を拭くと、絞れるほどの汗を吸い込んだ。

「盆地の気候は厳しいと嘆くのはルール違反だ。過酷だからこそ、美しい自然が磨かれる。四季だけでなく、人間だつてメリハリのきいている方がいい」

つい先日、そんなふざけた文章を書いた気がする。雑誌に載つた気がする。撤回しようと思う。湯豆腐で有名な店まで来た。

「豆腐まんじゅうですか？」

二年前のおぼちゃんの声が甦り、湯豆腐料理店の隣にある小さな出店を覗いた。

「いらつしやいませ」

中にいたのは学生のような若い男だ。首にタオルを引っ掛け、生地の薄い作務衣に身を包んだおぼちゃんの姿はない。

豆乳シャーベットを勧める店員に手を振り、豆腐まんじゅうを頼んだ。意外だつたらしく、若

い彼はぎこちなく笑った。それも当然だろう。夏の時期、まんじゅうがほとんど売れないことを私は知っている。

茶器と発泡スチロールの皿が載った盆を受け取ると、床几しょうぎに座った。まず、ぬるい茶を口に含む。まともに持てないほど熱いまんじゅうが、左右の手を行ったり来たりする。そうして助走をつけた後、意を決してかじりついた。

口の中がサウナのようになるのを我慢して噛み続けると、あの控えめな甘みを感じた。顔中に汗の筋を作り、満ち足りた気持ちになった私の表情を店員が気味悪そうに見ていた。

目の前には二年坂。

胸の内に耳を傾けてみると、訴えかけるように心音が早まる。

「お茶のお替わりどうですか？」

恐る恐るといった感じで店員が聞いてきた。そう言えば、おばちゃんもよくお茶を注いでくれた。

あれから確かに二年の時間が流れている。今さら不安の源泉を掘っても意味がない。

お替わりの茶を飲み干したところで、ようやく踏ん切りがついた。店員に盆を返すと、大きく一つ伸びをした。もう迷いはない。結果は全て受け入れよう。

石段に足をかけると、自転車をかき上げて上がる若者とすれ違った。そのハツラツとした足取りに触発されて、一気に駆け降りました。あの路地はすぐそこだ。

真っ直ぐ向かうつもりが、いつの間にか通りにあつたちりめん細工の店に入っていた。大学の合格発表を見に行くときも同じような時間稼ぎをした記憶がある。指摘されたことがないだけで、

私は人が思うよりもずっと繊細な人間なのだ。ちりめんで作られた七福神に手を合わせ、店を出た。

建ち並ぶ飲食店の合間に血管のように通った路地。意を決して進んでいくと、心覚えの通り、奥に石の踏み段が四つあった。それを上つて左折し、細い通りを歩く。行き止まりを右折すると、アスファルトの急な上り坂が視界に入る。

坂の左側にある背の高い建物は白い外壁が剥げ落ち、入り口も勝手口も見えない。右手の二階建てのアパートは、全ての窓が閉まりカーテンが引かれている。観光名所の路地裏は、完全に喧騒をかき消していた。

全く^{ひとけ}人気のない坂を上り切ると、さらに急な石の階段が続く。下から見上げてもその頂上は確認できない。辺りは竹林で日中でも薄暗く、取り残されたような雰囲気のでいで階段は夢とうつつの間をつないでいるように感じられる。

石の段にはコケが生え、両脇に溝がある。カケスがしわがれた声で鳴いた。竹の葉の狭間から陽の光が差し込んでいる。ハンカチが使い物にならないのでシャツの袖で額の汗を拭った。

“再会”を期してあのときと同じ服を選んだのだ。汗だくになったからには代償を得たい。

日陰はありがたかったが、体力消費は増した。一段上るごとに乱れるこの鼓動は、高鳴りなのか単なる運動不足なのか。頂上が見えるころには両太ももに不自然な張りが出て、つりそうになった。少なくとも運動不足は決定的なようだ。

息を切らし、どうにか階段を制覇した。両脚とも震えがきて立っているのもつらかった。辺りは砂地の細い道で、どこへ続いているか見当もつかない。上りきってからだと、確かめようとい

う気力も失せる。

右手にベージュの壁に囲われたスペースがある。壁沿いを歩くと「安全第一」と書かれた橙色のフェンスがあり、向こう側には生え放題で秩序のない竹林が見えた。

フェンスを除けて中へ入った。竹の間にすき間を見つけては足を入れて、少しずつ前進する。嵐山のような風情は微塵もない。また上空でカケスが鳴いた。

目の前に小屋が現れた。三角屋根の古い木の小屋だ。丸太の形そのままに組み合わせたシンプルな造りで、背の低い戸は開いている。戸の横にある柱に看板がかけられていた。

——二寧坂の二年箱——

ようやくたどり着いた。あれから二年。ここへ来ることだけが、この小屋こそが頼みの綱だった。

体をかがめて戸を潜り、仄暗い室内に入る。不規則に空いた穴から陽の光が差し込み、天然の照明となっている。不思議とさほどの暑さを感じない。

目の前には人の背より高い、奥行きのある木製棚が八列。棚には学校の下駄箱のような感じで、正方形に仕切られた箱がずらりと並ぶ。その一つひとつに蓋があり、鍵がついている。

入り口すぐ右手に置いてあるのは、ガラス蓋の付いた腰高の棚。幅はピアノの鍵盤部分ぐらいだろう。中は番号付きの鍵でびっしりと埋まっている。

言わばそれがこの小屋の全てだった。

ゆつくりと室内を一周してみたが、誰もいなかった。だが、気落ちしている場合ではない。済まされなければならないことがある。

ガラス蓋の前に立ち、棚を覗き込む。記憶にある箱の番号と一致するものを見つけた。蓋を開け、おもちゃのような斧の形をした鍵を取り出した。

目指すのは入り口に最も近い一列目の棚だ。奥に伸びる棚のちょうど真ん中辺り、目線とほぼ同じ高さの箱。

鍵を持つ手が震えている。目を閉じて深呼吸した。『会いたい』と願い、鍵を差し込んだ。右に九十度ひねり、開錠の音を聞いた。

壊れないようにそつと蓋を開ける。

四つ折りの紙きれが埃をかぶっていた。あるのはただそれだけ。恐れは容易に立ち去ろうとしない。

とりあえず財布から約束の千円を取り出して、箱の中に入れた。

二年前の光景が甦る。乱れ打つ脈を静めることをあきらめ、震えたままの指で紙切れを挟んだ。もう一度深呼吸して、紙を開いた。

立ちくらみがして箱に手をついた。それでも体を支えきれなくなつて座り込んだ。目頭が熱くなつたと思うと、湧いて出るように涙が溢れた。堪えきれなくなつて、声を上げて泣いた。

絞り出すようにして、女の名を口にした。

二〇一二年二月 「祇園の夜」

三条通りから木屋町通りへ。

高瀬川沿いを南に、リズムよく足を前へ運ぶ。枯れた桜の木々は見るからに寒々しいが、この小川には通年漂う風情がある。歓楽街にたなびくギラついた夜気も、さらさらと水に流してしまふ。酒と同時に街を楽しむのが京の流儀だ。知ったような口をきく私は、地元の出身者ではない。そう、実は無責任だ。

膝丈のコートに両手を突っ込んで、颯爽と人波をかき分けて行く。キャバクラとガールズバーの客引きが一人ずつ。ヘラヘラと笑う男に返す言葉などない。いい加減、煩わしくなってきたところへ三人目の兄ちゃんに行く手を阻まれた。無精髭が何とも汚らしい。その口が開かれんとしたとき、すつと路地へ入る。

京都はいい。いつも小径こみちが助けてくれる。

路地を抜けるとそこは先斗町。軒先を柔らかに照らす提灯や行燈のオレンジ色が優しい。佇まいの凜々しい割烹に路地裏の妖しい飲み屋、いるだけで非日常を味わえる。早くもアルコールに寛容な気分になってきた。

左手に夜の鴨川、右手に占い師。顔見知りの女が営業用の微笑で手招きする。この寒いのに脚